

現代日本語における漢語と現代中国語

——並列語（リンク語）・類縁語をめぐって——

中 川 正 之

中国語には“道路・孤独・進行”のような並列語が存在する（以下、区別が必要な場合、「」で日本語を、“ ”で中国語を、『 』で意味を示す。また、カタカナ表記で音読みを、ひらがな表記で訓読みを表す。漢字は可能な限り日本語で通用しているものを用いる）。

中国語は基本的には単音節語であり音節数も多くないので、同音異義語が多い。そこで“道”と“路”を並べて“道路”のように複音節化し同音衝突を回避しているとする説がある。それも一つであろう。あるいは中国語が、類型論的には、Head の位置が前にある言語と後ろにある言語との中間的存在であること（Greenberg 1966）・（橋本 1978）・（中川 1992）とも、無関係でないかも知れない。解明すべきことは多くあるが、筆者はまず、中国語になぜかくも並列語が多量に存在するのかということ疑問に思う。本稿は、中川（2005年）で述べたリンク語・類縁語が並列語解明の糸口になり得るとの予測のもと筆者が収集した用例を列挙し、初歩的な分類と説明を加えたものである。

漢語と思われているものの中には日本製のものが少なからず存在している。ある語が中国語の中でできたものなのか、日本語の中でできたものなのかは、最終的には文献学的調査にゆだねられなければならない。しかし、ここでは中国語の原理に従っているものをひとしく漢語として取り扱い、出自の詮索は行わない。それは通時的研究や文献学的研究の価値を軽視しているからではない。筆者の最終的な目的が、日本語の中で漢語が現代中国語とどのような乖離をみせているのかを記述し、その原因を言語類型論や認知言語学的観点から明らかにしたいことにあるからである。

また、ある語が並列なのか、それとも「漆黑」のごとく『漆のような黒』とパラフレーズできるような〔修飾語＋中心語〕構造なのか判然としない場合も少なくない。例えば“繊細”は『繊維のごとく細い』と解釈すべきだと思うが、中国語話者には“繊”自体が『細い』の意味であるとするものが多い。そうであれば、“繊細”は並列語ということになる。

さらに、たとえば「下降」と「降下」は、日本語ではいずれもが単語であり、それぞれが並列語か否か詮議することが可能であるが、中国語では“下降”は単語であっても、“降下”は動詞“降”が方向補語の“下”を伴ったフレーズであるとする語感がはたらくようである。朱徳熙（1985）が指摘するように、中国語は語構成とシンタクスに同じ原理がはたらくので、語とフレーズ・文は連続的である。

様々な議論はあるが本稿では、文法的に等価で、意味的にも共通点を持つもの（類義語）を並べたものを並列語とする。

なお、用いるデータで出典を記していないものは、筆者も編集に参加した『白水社中国語辞典』に掲載されている用例、あるいはそのために、中国語話者の手になる文学作品・新聞記事などから集められた用例、最近はインターネット検索によって入手したものである。日本語の語感、筆者個人のものを中心にするが、中国語について筆者は語感を持たない。しかも、あの広大な地域で、多様なバリエーションをもつ言葉を基に書かれた文献から40年にわたって収集してきたものであり、

現在の中国語から見れば、不自然なものが含まれる可能性が少なくない。日本語も同様であろう。次の諸例は、『新潮社100冊の本』から検索し整理した「隆盛」の用例である。

- (1) 基一郎だからこそこの隆盛をみることができたのだ。 (北杜夫『楡家の人びと』)
- (2) 娘に立派な医者の子を迎えて、そして病院を隆盛へと導いたのは、亡き父基一郎の卓抜な方策である。 (北杜夫『楡家の人びと』)
- (3) しかし青雲堂は決して隆盛しているとはいえなかった。 (北杜夫『楡家の人びと』)
- (4) 京橋に七階建ての本社を持つ隆盛な事業家の住宅とは、とても思えない。
(星新一『人民は弱し、官吏は強し』)
- (5) 夫人は多く、それぞれに生んだ子供たちが十余人もあって、源氏に比べると子福者である。ほとんど男の子たちで、次々に成人して相応に出世してゆき、源氏に劣らず家運の隆盛な一家であった。 (田辺聖子『新源氏物語』)
- (6) 皮膚が白いわりには、固い肉が盛りあがり、その隆盛の一つ一つが汗で光ってただけしいばかりの背である。 (司馬遼太郎『国盗り物語』)

引用者の語感で問題がないのは、(1) (2) のような名詞用法のみであり、(3) のサ変動詞「隆盛している」、(4) (5) のナ形容詞「隆盛な」(以下連体修飾する際「ナ」が介在するものを「ナ形容詞」と呼ぶ) はやや不自然である。(6) は名詞用法であるが、『筋肉の盛り上がり』のような具体的なものを指す用法は、極めて不自然に感じる。高名な作家の手になる文章であっても、日本語として安定した自然さを持つか否かは、別の問題であることは言うまでもないが、例(6)は作者が故意に破格の用い方をしたと考えられる。

「隆盛」がこのような多様な用い方をされるのは、現代日本語において、この語が衰退しているからであろう。衰退した語は、ごく限られた用法のなかで命脈を保つか、「隆盛」のように語感が失われていく。2005年大学院の博士課程で言語学を専攻する学生が大部分がこの語の語感を有していなかった。「隆盛」に対して「旺盛」は、「旺盛な食欲」など「欲」系との結びつきを強化するという特化を行い、日本語の中で生き延び、なお日本語話者の大部分が語感を持っている。

「故意の破格」の使用が計算済みのことも少なくない。たとえば、「神戸なお店」は、「神戸」という名詞がナ形容詞のごとく「お店」を修飾している。「不思議の国のアリス」は、普通はナ形容詞として用いられる「不思議」が名詞のごとく「の」を介して連体修飾している。「緊張の最前線」は、「緊張する」とサ変動詞として用いられるものが「の」を介している。いずれも破格と言わなければならない。しかし、「神戸」が『洒落た』といった通念を多くの人に共有されておれば『神戸らしい』の意味で使うことができるだろうし、「チョコレートの家」が『チョコレートでできた家』の意味ならば、『不思議でできた国』という意味で「不思議の国」ということも不可能ではない。「緊張の最前線」については分からないところが少なくないが、写真の解説や見出しのようなものを想起させる。次の中国語の“機密”も、破格の用法である。

(7) 他 帶着 很 機密 很 嚴重 的 臉色——小聲兒 問 那個 小鬍子：
 彼 帶びるとても 機密とても 嚴重 な 顔色 小聲 たずねる その 小さな 鬍
 彼はとても 秘密めかしてとても 深刻な表情で 小聲で 小柄な 鬍男に たずねた：

(張天翼『華威先生』)

彼がたずねる内容は、「昨日酒に酔ったかどうか」であって、『機密』にすべきような事柄ではない。形式的・役職好きの主人公“華威先生”の何事にも大げさな様を揶揄する作者の意図を読み取るべきであろう。

語感というものは、急速に変化することがある。日本語については、その語感の変遷に身を置いてきた筆者の今現在の語感を用い、中国語に関しては、ここ40年間に収集してきたものを用いるというのは、バランスを欠いたものであろう、可能な限りネイティブのチェックを受けるように心がけたが、ネイティブの語感からすれば、なお不自然なものが相当数含まれていることは否めない。しかし、引用者による改竄は一例もない。

筆者は『白水社中国語辞典』の編纂作業に長く関与していたので、辞書的説明には、あえてそれを使用せず、『小学館日中辞典』、『小学館中日辞典』（いずれも電子版）の記述を引用する。また「隆盛」で行ったように、ある程度限られたデータの中で出現頻度を見る場合は、『新潮社100冊の本』を用いた。

語の栄枯盛衰は、具体的なものや制度の場合、そのものの栄枯盛衰に連動することはいうまでもない。“同志”が現在の中国では『同性愛者のパートナー』を指すことを最近知った。動詞や形容詞の場合はさらに複雑である。1989年中国に滞在していたとき“反思（過去のことを考え直し再評価する）”という言葉が流行していた。現在では当時ほど耳にすることはない表現である。

コンピュータ用語で「検索する」を中国語では“搜索”というが、これは文語であって口語に使われることはなかったものであるが、この時代に活性化したということであろう。

中国の急速な経済発展により人の心も大きく変わった。何千年の間ほとんど変化しなかったものが、一夜にして急変するということが言語面でも見られるであろう。縄文時代が約1万年続いたことと、コンピュータが個人のものになって20年、その間の変化を想起すればよい。

「ガード(下)」が40歳前後の関西人に通じなかった。『上に鉄道が走っているところ』と説明すると、「高架下」ではないかと言う。筆者の語感では、「高架下」は、鉄道が上を走っている一定の長さをもつ商店街などの空間であるのに対して、「ガード下」は鉄道と道路が垂直に近い状態で交わり、鉄道はかならずしも高架でなく、道路が鉄道にもぐりこむ場合にも用いることが可能である。東京の二つの大学で調査を依頼したところ、大半の東京出身の学生には「ガード」が理解された。こういう地域差も問題になる。

「頂く」と「戴く」を併せると「頂戴」という並列語ができあがる。「謹む」と「慎む」を併せると「謹慎」という並列語ができあがる。『末』と類義語『端』を並べると「末端」になる、これを反転させると「端末」というコンピュータ用語になるが、反転語についてはすでに述べた(Nakagawa 1994)・(中川 2000・2005)。

現代中国語を見ていると、“下雨・出汗・頭疼・最快”のように日本人に判るような判らないよう

な語が多く存在する。その多くは、「降雨」の「降」が、並列語「下降」のもう一方の形態素「下」に置き換わって“下雨”になったようなものである。本稿では「降雨」と“下雨”を類縁語と呼び、両者を結びつけるという意味で「降下」のような並列語をリンク語と呼ぶことにする。

いくつか例を挙げてみる。

(現代中国語)	(リンク語)	(漢語)
下雨	下降	降雨
出汗	發出	發汗
頭疼	疼痛	頭痛
最快	快速	最速
通道	道路	通路

漢語の大部分は、古い時代の中国語であった。現代中国語では、“降雨”は気象用語に、“發汗”は漢方医学用語に用いられることが多く、日常生活では“下雨、出汗”に置き換わっている。さらには、“頭痛”のように古めかしい印象を与えるものも少なくない。

“速”にいたっては、“迅速・加速・急速”などの単語の一部に、化石のように痕跡をとどめるのみで、単独に用いられるときは“快”に取って代わられている。“快”は『快樂』の意味を原義とするのであろうが、『はやい』の意味を獲得する。それが、“快速”のように並列されると、『はやい』の意味が前面に出る。並列はまったく同じものを並べるということは少なく、並べることによってそれぞれがもっている共通部分が活性化されるという側面が強い¹⁾。

例えば「進む」は、「進行」と並ぶときは『いく』が、「進入」では『はいる』が活性化される。現代中国語では『はいる』が活性化している。

日本語に入った漢語は、中国語の中で起こった変化の波にさらされることなく、元の姿をとどめているものが少なくない。その古い形と現代中国語をリンクするものとして並列語の役割を強調しておきたい。並列語は、さきに述べたように同音衝突回避の手段のとしての役割、あるいは抽象概念・総称を表すものとしての役割も重要であるが、リンク語としての存在も見逃すことはできない。

話を類縁語にもどそう。類縁語の中には、日本語を基準にして見ると、A・Bともに日本語・中国語で通用しているもの（〔類縁語Ⅰ〕とする）、Aが日本語でも用いられないことはないが、Bよりも使用範囲が限られているもの（〔類縁語Ⅱ〕とする）、日本語ではAが通用していないもの（〔類縁語Ⅲ〕とする）、に大別することができる。

[類縁語Ⅰ]

A	リンク語（並列語）	B
改善	善良	改良
就職	職業	就業
品性	性質	品質
対談	談話	対話
論戦	戦争	論争
異議	議論	異論

活躍	躍動	活動
救援	援助	救助
護身	保護	保身
眼前	眼目	目前
着眼	眼目	着目
全身	身体	全体
教養	養育	教育
密接	接着	密着
自生	生活	自活
破壞	壞滅	破滅
兼任	任務	兼務
主任	任務	主務
高等	等級	高級
多感	感情	多情
同感	感情	同情
触感	感覺	觸覺
中斷	斷絕	中絕
現狀	現實	実狀
即時	時刻	即刻
部外者	部局	局外者

[類縁語Ⅱ]

大樹	樹木	大木
無量	數量	無數
窮乏	貧窮	貧乏
直覺	感覺	直感
裸身	身体	裸体

[類縁語Ⅲ]

牙科	齒牙	齒科
航天	天空	航空
滅火	消滅	消火
通道	道路	通路
鐵路	道路	鐵道
計策	計畫	画策
賀電	祝賀	祝電
賀辭	祝賀	祝辭
填滿	充填	充滿
農人	人民	農民

居民	居住	住民
移居	居住	移住
雪恥	恥辱	雪辱
号哭	哭泣	号泣
加快	快速	加速
最快	快速	最速
優質	優良	良質
船身	身体	船体
身躯	身体	体躯
頭疼	疼痛	頭痛
増髪	毛髮	増毛
油画	絵画	油絵
家務	事務	家事
連連	連続	続続
集体	集団	団体
違背	背反	違反
低智	智能	低能
飛行衣	衣服	飛行服
原子能	能力	原子力
同性恋	恋愛	同性愛
拡音器	音声	拡声器

〔類縁語 I〕は、A と B が日本語や中国語の中でどう異なるのか問題になる。

たとえば、「改善」と「改良」では、「改善」が『悪い点を改める』、「改良」が『より良く改める』という点が際立つ。「改善」の「善」が、「善悪」にみられるように二項対立的（ブルカテゴリー）であるのに対して、「改良」の「良」は、「やや良い、非常に良い」のように段階的（プロトタイプカテゴリー）であるという点が決定的な要因となっていると思われる。

「自生（現代中国語では“自生自滅”という形で用いられる）、「品質」は、日本語では人間には用いなが、中国語ではそのような制約はない。「護身：保身」、「眼前：目前」、「全身：全体」では後者の意味が抽象化している、それは中国語においても同様である。なぜそのような並行現象が存在するのは、非常に興味深いことである。中国語のみで対立する（Ⅲに属する）“船身—身体—船体”の“船身”と“船体”でも前者が具体的であり、後者は抽象的である。この例から、“身”と“体”自体に具体と抽象の根源があることが推察される。「着眼—着目」で具体・抽象の差が顕著にでないのは、「眼・目」が本来的に機能をまず前面に出す語であることによるのであろう。

また、「教育」と「教養」は、前者が「教育する」のように動詞の用法をもつのに、後者は名詞でしかない。これは現代中国語の“教育”と“教養”も同様である。「密着」と「密接」も問題になる。「密着する」は「密着取材」のように動的であるが、「密接する」は「住宅が密接している」のように静的である。また「密接」は「密接な関係」のように形容詞として用いる。

なお、リンク語そのものにも、日中両国語で意味的・文法的ズレが観察されることがある。例え

ば、「眼目」について、日本語と中国語の辞書には以下のような記載がなされている。

- ガンモク 【眼目】 ①まなこ。め。
 ②物事の肝心なところ。主観。要点。『広辞苑第五版』
- yǎnmù 【眼目】 ①目。
 ②人の耳目となる人。密偵。 『小学館日中辞典』

筆者の日本語には、『広辞苑』の①の用法はない。

また、リンク語が鏡像関係にあり、しかも意味がかなりずれるものがある。来源を同じくするの
 かどうか疑われる。

- スンブン 【寸分】 すこしばかり。いささか。 『広辞苑第五版』
- fēncun 【分寸】 程合い。ちょうどよい程度。 『小学館日中辞典』

〔類縁語Ⅱ〕は、「大樹」は「よらば大樹の影」、「感慨無量」のような固定された表現に命脈を保っているにすぎない。「窮乏」も「窮乏生活」などに限定されている。「直覚」は『広辞苑』に収録されているが、筆者は用いない。小林秀雄氏は1961年に行った『現代思想について』という講演のなかで「直覚から分析への道」という言葉を何度も繰り返している。質疑応答の中で質問にたった若い聴衆は「直感」を用いているが、氏は終始「直覚」を用いている。(小林秀雄講演集第4巻『現代思想について』新潮社2004年)。日本語でも中国語と同様「直覚」がリンク語「感覚」を介して「直感」に換わっているということであろう。最近でも石原慎太郎東京都知事が「オリンピック招致を熱願している」と発言されていた。筆者は並列語「願望」をリンク語とする「熱望」を用いる。

「裸身」と「裸体」はいずれもが衰退しているとも、いずれもがまだ命脈を保っているとも言えるかもしれない。後者の場合は、Iに属することになる。

〔類縁語Ⅲ〕は、Aグループが日本語では通用していないものである。これが日本人にとって、判るような判らないような中国語のグループになる。誤解を生じることの原因になることも少なくないので、煩を厭わず例を挙げておいた。このような語が多数存在するのは、外来要素である漢語が、受容当時の意味を保持する傾向が強いのにに対して、中国語のそれが、変化の波に巻き込まれることによる。つまり、外来要素としての日本漢語の保守性と、生きている言葉としての中国語の変化のギャップによるものである。それ以外にも、とくに中国語の場合、先にも述べたし後でも繰り返すように、一語として固定したものか、臨時的にフレーズとして、一見単語の体裁をとったものかどうかという問題である。

Aで通用していない“牙科”の“牙”と“齒”が、類義語ないしは同義語であることは、日本語にも存在する「歯牙」という並列語からも明白である。もっとも「歯牙」は、日本語においては「歯牙にもかけぬ」に限定されている。かつて言語年代学では変化しない語の代表とされていた身体部位が、中国語では多く変化していることが注目される。

中国を代表するホテルである北京飯店には、「消火器」と「滅火器」という表示が混在して用いられている。前者のほうがやや古めかしい表現であるというのがネイティブの語感である。

現代中国語では、“充滿”は“填滿”と比べると、『充ちる・充たす』ものが抽象的である。“農民”は“農人”より抽象的である。“農人”について語感をもたない中国人は少なくない。「低能」は、中国語にも存在するが、中国語のみに存在する“低智”は、“弱智”に置き換わっている。いわゆる差別語の排除であろう。日本語の「低能」は、『低級』とほぼ近い意味に移行し、生き延びている。

「滅火器・填滿・農人」などAグループは、すべて日本語には存在していない。

“同性恋”は「恋愛」をリンク語とする「同性愛」のことである。こういう語の存在が逆に両国語における『恋』や『愛』の内実にズレを生じさせたり、ズレを増幅したりすることになる。因みに、中国語の“可愛”は“可愛的祖国”のように用いられることがある²⁾。

“拡音器”は「音声」をリンク語とする「拡声器」のことである。現代中国語では人間をはじめとする生物などの発する「声」と、それ以外のものが出す「音」を区別せず、ひっくるめて“声音”というが、“拡音器”の例からも分かるように“音”のほうが生産的で、造語力が強い。日本語では、「声」と「音」の区別は厳格で、『音を遮断する壁』は「防音壁」であるが、『人間の声を拡大する』のは「拡声器」である。しかし、人間以外でも「銃声」のような例がある。現代中国語でも“槍声”と言う。「銃口」などの例からすると「銃」は擬人化されやすいということであろうか³⁾。先に挙げた「自生・品質」が人間には用いられないということを思い併せれば、日本語が「いる：ある」、「養う：育てる：飼う」、「連れていく：持っていく」のように人間が否かに敏感な言語である傾向の表れと言えよう。

このⅠⅡⅢの分類は日本語を基準として見たものであって、中国語を基準にして分類すると当然異なったものになる。例えば、「綺麗・頂戴・号泣」のように日本語で通用しているのに、中国語ではごく限られた用法しか持たぬもの、あるいは存在しないものが、分類から漏れることになる。以下のようなものが問題になる。そこで、一応〔類縁語Ⅳ〕として幾つかの例を挙げておく。

〔類縁語Ⅳ〕

A	並列語	B
号哭	哭泣	号泣
雪恥	恥辱	雪辱
利息	子息	利子
民宿	宿泊	民泊
即席	座席	即座
飼養	養育	飼育
厚待	待遇	厚遇

日本語では、例えば「芸芸」という並列語をリンク語として、「達人芸（音読み）」と「達人技（重箱読み）」が存在している。「達人」という漢語は少なくとも現代中国語には存在しないので、“達人芸”も“達人技”も中国語には存在しないのは当然である。しかし、存在しない理由を述べるのは、非常に難しいし、存在していないことを証明することは、不可能に近い。中国語においては、固定された語としては存在していなくても、臨時的に文の中で、あるいはキャッチコピーのようなフレー

ズのなかで、臨時的結合を作ることはめずらしくない。とりわけの並列語については、類義語つまり形態素が機能的・位相的に同じレベルにあり、意味的にある種の共通項があれば、臨時的に並べられる可能性が高い。それを母語話者でないものが見分けるのはほとんど不可能に近い。極端な言い方をすれば、中国語には何でも存在している可能性すらあるということが、IVをI II IIIと同列に並べることを避けた最大の理由である。しかも先に述べたように、それが一語として固定されたものなのか、フレーズ内部でただ並んだだけのものなのかの判別が、母語話者でも困難であることが少なくない。つまり、例えば、“飼育・厚遇”が存在しないというのも、『小学館中日辞典』には収録されていないので、一応存在しないことにしたという程度で、存在しないという保証があるわけではない。

[類縁語Ⅲ]に話を戻す。これは、中国語においては、日本語が大量に漢語を受容した後で、活性部分が並列語のXYのXからYに移り、Yが日常語化するという変化の結果であり、今後とも増加するであろう。

“号哭”と「号泣」をリンクする並列語“哭泣”は、現代日本語には存在しない。

次の例は、並列語を介して同義語・類義語が常用語に置き換わるさまを物語ると同時に、日本語には存在しない、あるいは少なくとも通用していない並列語が、中国語には大量に存在していることを窺わせるものである。

[A]

並列語	現代日本語	現代中国語
放置	置(く)	放
進入	入(いる)	進
幫助	助(ける)	幫
戲劇	劇	戲
絵画	絵	画

[B]

並列語	現代日本語	現代中国語
等待	待(つ)	等
喫食	食(べる)	喫(吃)
止住	止	住
迎接	迎	接
站立	立	站
乘坐	乘	坐
牆壁	牆	壁
夜晚	夜	晚

Aの「放置・進入・幫助・貧窮」は、今なお日本語でも使用されており、そこから現代中国語の“放・進・幫・窮”の意味を推測することは不可能ではない。ただ、文体的、意味的、文法的なズレは、多かれ少なかれどの語にも存在する（文法的ズレについては（中川1995を参照のこと）。そのズレの一つ一つをもらさず記述したものが、理想の日中辞典ということになる。現代中国語では、“放”は「置く」という日本語と同じ意味で用いられているが、日本語においては、「放」が「放置」と並列されてはじめて『置く』という側面が顕在化するということでもある。ただ日本語の「放置」や「満足」の来源が、「置きっぱなし」や「満ち足りる」であるとすれば、問題は違った色彩を帯びることになる。

中国語の“幫助”は、広く『助ける・手伝う』の意味で用いられるが、日本語では「殺人幫助」など穏やかでないものに限定される。このような限定を特化と呼ぶことにしたいが、この特化、つまり使用における限定は、フランス語の「シェフ」が本来の『主任』から『料理の主任』になるように、外来語に一般的傾向として認められるものではある。漢語の場合は、「放置」や「幫助」のように動作対象の特化という形で現れることがとくに多い。

「戯劇」の「戯」も現在では「戯曲」に限られているのではないだろうか。中国語では“戯”は独立して用いられる。

「絵画」の「絵」、「画」はいずれも日本語で用いられているものであるが、独立して用いられる場合は「絵」である。中国語では“画”に置き換わっている⁴⁾。

Bの“等待・喫食・止住・迎接・站立・乗坐・墻壁・夜晚”は、日本語ではふつうに使われるものではない（「喫食」は軍隊用語として用いられたようである）。さらに、例えば現代中国語では、反義語を並べた『送り迎え』に相当する語は、やや古めかしい“迎送（送迎）”から“接送”に移行している。そのような意味で、リンク語は、古典中国語・漢語と現代中国語をリンクしているとも言える。“站立”は日本語では通用しない語である。中国語の“站”と“立”では後者が『きちっと立つ』というニュアンスが出るが、それは“立”が古語的であるのか、“立”の語義に内在するのか不明である。

乗り物に『のる』ことを表す“乗坐”は、現代中国語では、“坐”が活性化しており、『バスに乗る』は“坐公共汽車”のように表現する。しかし、『試乗する』の意味の場合は、“試乗”を用いる。“試乗”のように、その出現が比較的最近であろうと思われる表現に“乗”が用いられるといったように、衰退や活性化には程度差がある。

“夜晚”という並列語は、現代日本語で用いられることはないが、多くの日本語話者は『夕方から夜までの時間帯』を「晩」、それ以降を「夜」と区別している。それは、例えば「夜食」のほうが「晩ご飯」より時間帯としては後になるといったこととも符合する（「夜ご飯」という表現を耳にしたこともある）。しかし筆者が関西方言のせいであろうか、筆者には「昨日の晩、大雨が降った」の「晩」は『夜の時間帯』であってもかまわない。「晩」と「夜」の差は、前者がより口語的という感じが強い。「夜」は『晩よりも後』ということから、『寝ているべき時間帯』という意味を派生することがあるのだろう。その結果、ある事柄の発生を知覚するのは、睡眠中の「夜」よりも、覚醒時の「晩」の方がフィットしやすいということなのかも知れない。

「晩」が「晩秋」のように『おそい』の意味で用いられることは指摘するまでもない。

次は、いずれも日本語にも存在しているグループである。

転	轉換	換
停	停止	止
停	停泊	泊
超	超越	越
聽	聽聞	聞
善	善良	良
優	優秀	秀
優	優良	良
永	永久	久
毛	毛髮	髮
羽	羽毛	毛
命	命令	令
命	運命 (命運)	運

このグループが、漢字の使い分けと直接関わるものである。「転」と「換」、「停」と「止」、「停」と「泊」などがそれぞれの言語でどのような意味をもち、それが並列されたときどのような意味用法、ニュアンスの差をもつのか、個々の事例に基づいて調査しなければならない。たとえば、「羽」と「毛」の境界はどこにあるのか、生まれたばかりの鳥の全身を覆っている「産毛」は「毛」なのか「羽」なのかといったように。また「聽」と「聞」のように、前者が積極的に『聞く』こと、後者が受動的に『聞こえる』ことという元の意味が、どのように変化しているのかの記述も必要である。さらには、日本語の「運 (がよい)」と、中国語の“命 (好)”を比べれば、前者が『(休講掲示板を見て) ラッキー』のように些細な事柄にも用いられ、後者は『運命・定め』に近く、事柄としては重大なものに傾斜すること、あるいは中国語母語話者にとってはそれが『いのち』と表裏をなすがごとく分離できないものであるなど、漢字の重層性と背後にある文化や世界感を視野にいった考察が必要である。さらに、使役構文を作る“令”が「命令」の「命」や「令」と如何なる関係にあるのか、文献学的調査を踏まえた実証的研究とともに、意味変化や文法化にみられる言語普遍性との関係、認知的説明などなすべきことは非常に多い。

上記の他に、例えば、中国語の“男装 (男性用の服)・女装 (女性用の服)”は「服装」をリンク語として「服」にとって替わったものと考えられる。結果として日本語の「男装・女装」と混同される可能性のある語になっている。

「服」については、「衣服」の類縁語である「服装」を考慮すると、「装」との関係も問題になる。「(派手な衣服で) 装う」、「(善人を) 装う」、「(皿に) 装う」のようにニューロンが拡張するようにネットワークを複雑なものにしている。

参考書目

- 荒川清秀 (2007) 「日中両国語における漢語語基の意味と造語力」彭飛編『日中対照言語学研究論文集』和泉書院
- 朱徳熙 (1885) 中川正之・木村英樹編訳『文法のはなし』光生館 1986 年。同書は日本版のために書き下ろされたものであるが、1985 年に“語法答問”と題して商務印書館から中国語版が出版された。

- 中川正之 (1992) 「類型論からみた日本語・中国語・英語」 大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集 (上)』くろしお出版、のち合冊本 1997 年
- 中川正之 (1995) 「単語の日中対照」『日本語学』Vol.14 明治書院 宮地裕編『「日本語学」テーマ別ファイル 3 語彙 (I)』(2005 年 6 月) に再録
- 中川正之 (2000) 「鏡像語を作る 2, 3 の要因」 佐治圭三教授古稀記念論文集『日本と中国—ことばの梯』くろしお出版
- 中川正之 (2005) 『漢語からみえる世界と世間』 岩波書店
- Nakagawa Masayuki (1994) Word Order in Modern Chinese—A Cognitive Perspective “Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics” The Organizing Committee The 26th Inter-national Conference on Sino-Tibetan Language and Linguistics
- 橋本萬太郎 (1978) 『言語類型地理論』 弘文堂
- Greenberg, Joseph H (1966) Universals of Language MIT press

注

- 1) 「快」には『速い』の意味があるのか否かという議論については、荒川 (2007) を参照のこと。
- 2) “可愛”と「可愛い」は語源が異なるという説もある。
- 3) 「銃口・銃身」という単語の存在は示唆的である。
- 4) ここに「図」を加えると「絵図」、「図絵」、「図画」と錯綜してくる (中国語には“画図”が存在する)。

(本学文学部教授)